

〔研究報告〕

ひきこもり状態にある子どもの親が語る困難

松本 訓枝¹⁾ 日比 薫²⁾ 谷口 恵美子³⁾Difficulties Faced by the *Hikikomori* Problem Narrated by the ParentsKunie Matsumoto¹⁾, Kaori Hibi²⁾ and Emiko Taniguchi³⁾

要旨

本研究の目的は、ひきこもり状態にある子どもの親の困難を明らかにすることにある。

ひきこもり者の状況についてある程度整理し語ることが可能な親のうち、研究への同意が得られた父親1名、母親3名に半構成的面接調査を実施した。

その結果、ひきこもり当初の親の対応では、ひきこもりをどう理解し対応して良いのかに苦慮し、なすすべがない困難な状況下で【接触を回避する】【怒る】【子どもを信じるしかない】など、かろうじて可能な対応を講じていた。しかし、その後の現在の対応では、ひきこもり状態から歩み始めたケースでは【経済的支援の模索】と【待つ】対応を、自室に閉じこもりひきこもり状態に変化がないケースでは【家族との会話をもつことの模索】【かかわるきっかけの模索】といった対応をとり、ひきこもり状態に即した対応の相違が浮き彫りになった。今後、親として対応すると良いと思うことでは、ひきこもり者への支援が行き届かない分、家族、とりわけ親の関わりが問われる事態となっていることが想像された。親が考える社会参加の内容には【就労する】【仲間と良い体験をする】があがった。一方で、【地域に存在する】【地域での認知】という対面的な関わりのある近隣コミュニティの認知、受け入れをあげた親もいた。ひきこもり者の社会参加の意思には【就労したい】【人と関わりたい】があがった。

ひきこもり状態から歩み始めたケースでは、子どもを経済的に自立させるという社会化エージェントの役割を果たせないことによる困難が、ひきこもり状態に変化がないケースでは、ひきこもり当初の親の対応にみられた子どもをどう理解すべきか、講じるべき対応がない、わからないというケア役割を果たせないことによる困難があった。身近な近隣コミュニティとひきこもり者・親との関係をつなぐ支援、親を含めた周囲のひきこもりへの理解と対応の啓発、地域社会の関係機関が連携した体制整備が求められる。

キーワード：ひきこもり問題、ひきこもり状態にある子どもの親、ひきこもりの困難

I. 目的

ひきこもり問題は若者の社会的自立の問題として社会問題化し、2010年に子ども・若者育成支援推進法がひきこもりなど若者たちの抱える様々な課題を克服するために施行された。この法律によって、様々な機関や団体の資源を

動員し、官と民との協働で子ども・若者の抱える複層化した問題に包括的に対応し解決することが目指されるようになった。Y県では、ひきこもり者を支援する種々の機関や団体・施設がネットワークを構築し、包括的な支援を講じていこうと取り組み始めている。しかし、その支援は動き

1) 岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 育成期看護学領域 Nursing of Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

3) 岐阜聖徳学園大学 看護学部看護学科 Department of Nursing, Faculty of Nursing, Gifu Shotoku Gakuen University

出したばかりであり、公的な支援が整備されていない中でNPO団体を主とした支援がなされている実情にある。

こうした現状下、Y県X町は保健師を中心にひきこもり者への支援に力を入れようとしている自治体である。家庭への訪問支援により、ひきこもり者との1対1でのコミュニケーションを図りながら関係を築き、保健師はひきこもり者、その家族とつながり、訪問支援は一定の成果をあげてきた。しかし、さらに今後の支援を長期的スパンでひきこもり者の自立の点から考えた場合に、ひきこもり者がこうした保健師とのつながりから、次のステップとして家から外へ出て他の人々、社会とつながることができるようにどのような支援策を講じていくかが大きな課題となっている。ひきこもり支援は、家族による支援から始まり、支援者による家族支援、やがて家族と支援者によるひきこもり者への支援、最も高次の段階として地域社会とつながる支援に分けられる(註1)。この点からして、X町では、家族と支援者による支援の段階にあり、進んだ段階の支援が行われていることがわかる。加えて、ひきこもり支援は、NPO等の民間団体が主導することが多く、運営資金調達の面での課題が常にあり、支援が途絶えてしまう可能性や十分な支援が行うことができない問題があり(註2)、行政が資金を捻出しひきこもり支援を主に行うことは稀である。X町では、行政主導のひきこもり者と家族への進んだ段階の支援が行われ、今後の支援においてひきこもり者が社会とつながる支援をどうすべきかの課題を認識し、NPO等の民間団体とは異なり、継続的な支援体制の構築が可能である。そのため、ひきこもり支援のモデル地区としてX町を対象地区として選定し、ひきこもりの実態を踏まえた支援体制のあり方を検討し、今後のひきこもり支援の一助としたい。

こうした現状を受け、本研究では、今回は第一報告としてひきこもりの子どもの親にとっての困難を明らかにする。そして、次回の第二報告では第一報告で明らかになったことをもとに地域特性を生かしたひきこもり者の自立に向けた支援体制、家族支援のあり方を追究することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査方法

ひきこもりの子どもの親にとっての困難を明らかにする

ために、Y県X町保健師が把握しているひきこもり状態にある者の中でその状況についてある程度整理し語ることが可能な親5名のうち、同意が得られた父親1名、母親3名(註3)に90分ほどの半構成的面接調査を2014年12月～2015年1月に実施した。調査対象者数が4名と少ないことにより、得られた知見を一般化することに留意する必要があるが、親にとっての困難を明らかにするという目的に即せば、ひきこもり期間が14年～29年にわたって長期化していることからして様々な過程を経て現在に至っていることが想像され、4名の対象者の語りは貴重である。

調査内容は、ひきこもり支援をおこなっているNPO法人なでしこの会(2010)がひきこもりの実態を明らかにするために作成した調査票を利用し、学歴と職歴を加えた。ひきこもり者に関わる基本情報として、性別、年齢、学歴、職歴、ひきこもり期間、ひきこもりの時期ときっかけ、起床・就寝時間、食事摂取の回数、家族との会話の有無、自宅での過ごし方、外出の有無、就労あるいは就労への意思の有無、利用した相談機関について尋ねた。そして、ひきこもりに係わる親の困難を明らかにするために、親のひきこもり状態にある子どもへの関わりを中心に尋ねた。調査項目は、当初の親の対応、現在の親が困っている内容とそれへの対応、これまで取り組んできたひきこもり者への接し方で良かったと思うこと、次の段階へ一歩進むために親として取り組むと良いと思うこと、親にとってのひきこもり者の社会参加の内容についてである。

分析では、研究代表者が実施した調査で得られたデータを共同研究者による検討会で調査内容ごとに類似した内容で整理し、類似した内容に名前を付した。分類は【 】、語りの内容は『 』で示した。また、親のひきこもりの子どもへの関わりに関連があるであろう子どものひきこもりの状態について捉えた。具体的には、現在の親が困っている内容とそれへの対応、次の段階へ一歩進むために親として取り組むと良いと思うことについて、ひきこもり者の家族との会話の有無、外出の有無、就労あるいは就労への意思の有無で個別にみた。

2. 本研究のひきこもりの定義

本研究では、ひきこもりを厚生労働省によるひきこもりの評価・支援に関するガイドラインの「様々な要因の結果として社会参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6ヶ月以

上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形で外出をしてもよい）を指す現象概念である」（齋藤万比古，2007，p.6）に依拠し、家族以外の対人関係がない状態、ひきこもりの原因が精神障害ではない状態として捉える。しかし、実際には、ひきこもりの長期化にともなって精神疾患が関係しているケースがあり（齋藤，2002）、問題をひきこもりとするか、精神障害とするかは、結局のところひきこもり者の周囲の人々の判断に任せられる。そのため、本研究では、親や支援者などの周囲の者が、家族以外の対人関係がなく、かつひきこもりの原因が精神障害ではない状態にあると捉え、ひきこもりであると判断したことによりひきこもり状態にある者とする。

3. 倫理的配慮

対象となる保護者に、X町保健師が事前に研究の目的と内容、研究への参加は自由意思であること、研究協力が得られない場合に不利益を被らないことを伝えた上で説明書と同意書を郵送し、研究代表者が大学研究室への同意書の返送をもって研究への同意を確認した。調査は保護者の希望する自宅や公共施設において実施し、聞き取り内容は対象者の許可を得た上でメモを取った。調査対象となる親、X町を匿名化し、個人・機関が特定されないようにした。

NPO法人なでしこの会が作成した調査票の使用に当たっては、当法人に本研究以外に使用しないことを確約し、同意書の提出をもって調査票使用の許可を得た。

本研究は、岐阜県立看護大学研究倫理審査委員会から承認を得て実施している（承認番号0119 承認年月2014年10月）。

III. 結果

1. ひきこもり者と親の属性

全員男性であり、年齢は20歳代が1名、30歳代が1名、40歳代が2名、学歴は中学卒業が1名、高等学校卒業が3名であった。学卒後の職歴では、職歴有りが3名、無しが1名、有りの3名のうち2名が2職種、1名が就労の意思があるにもかかわらず仕事内容を理解することができずに離職・転職を繰り返し14職種ほどを経験していた。ひきこもり期間は、14～29年と長期に渡っている。ひきこもりの時期は、中学校から1名、就職してから3名であり、就職者の3名は就職後1～5年後にひきこもり状態となり、

ひきこもりのきっかけには、金銭問題、事故、進路選択、不明があがった。起床時間・就寝時間は、早寝早起きの理想的な生活習慣を過ごしている者が2名、昼夜逆転の状態にある者が1名、不明が1名であった。食事については、3食摂取が2名、夕食のみが1名、不明が1名であった。家族との会話は4名全員があり、そのうち1名は問い合わせへの応答のみであった。自宅では、テレビ、DVD視聴、インターネット、家事手伝いなどをしながら過ごしていた。外出は4名のうち3名が可能であった。就労の意思のある者は3名で、そのうち現在作業所で就労している者が1名、就労を目指して日常生活の自立訓練を受けている者が1名いた。相談機関は4名全員が利用し、利用した機関には、保健所や精神保健福祉センター、居住自治体の担当課、精神科、民間支援団体、警察があがった。なお、ひきこもり後に統合失調症の診断を3名が受けていた。

調査対象の年齢は、父親が70歳代1名、母親が80歳代1名、50歳代2名であった。

2. ひきこもりに係わる親の対応

1) ひきこもり当初の親の対応

表1にひきこもり当初の親の対応を示した。【接触を回避する】では『(私は)〇〇〇に勤めていて(息子に)会わなかった。食事だけは置いて行って。話すこともなく、あえて避けていた感じ』『無理に学校に行かせることはなかった。先生も家に来て話をするが、学校に行かせようとすると山の方に逃げたり。大きな騒動になってびっくりして、それから(自分たちは)何も言わなくなった』といった子どもと距離をとる対応がなされていた。それとは逆に、【怒る】(『本人(息子)に怒ってみたり。(息子は)タバコを1日3箱、60本吸う。食事はするが、働かない。物を壊すし、家に火をつけたり、近所にどなりちらしたり』)という語りもみられた。また、【どうして良いかわからない】では『統合失調症の知識がなくて、どう対応していいかわからなくて。もっと知識があれば良かった』といった後悔の念が見受けられ、【子どもを信じるしかない】では『テレビで事件が起きるたびにこうならなければならないと思って。息子を信じてやらねばと』といった思いも語られた。

2) 現在の親が困っている内容と対応

困難が【今はない】(『今のところはない。皆さんに助けてもらっている』)という語りがある一方で、【死後の金銭的な不安】(『私たちが死んだらどうしようか。世の中先立

表1 ひきこもり当初の親の対応

分類	語りの内容
接触を回避する	(私は) ○○○に勤めていて(息子に) 会わなかった。食事だけは置いて行って。話すこともなく、あえて避けていた感じ 無理に学校に行かせることはなかった。先生も家に来て話をするが、学校に行かせようとすると山の方に逃げたり。大きな騒動になってびっくりして、それから(自分たちは) 何も言わなくなった
怒る	本人(息子)に怒ってみたい。(息子は) タバコを1日3箱、60本吸う。食事はするが、働かない。物を壊すし、家に火をつけたり、近所にどなりちらしたり
どうして良いかわからない	統合失調症の知識がなくて、どう対応していいかわからなくて。もっと知識があれば良かった
子どもを信じるしかない	テレビで事件が起きるたびにこうならなければと思って。息子を信じてやらねばと

* () は補注

表2-1 現在の親が困っている内容とひきこもり者の状態

分類	語りの内容	家族との会話の有無	外出の有無	就労あるいは就労への意思の有無
今はない	今のところはない。皆さんに助けられている	有り	有り	有り
死後の金銭的な不安	私たちが死んだらどうしようか。世の中先立つものはお金なので	有り	有り	有り
子どもの健康への不安	体重を減らしてほしい。タバコをやめてほしい	有り	有り	有り
家族との会話のなさ	どうしたら家族の中でしゃべれるか。それからやっついていかないと。親子の間、きょうだいの間でしゃべれるようにならないか	有り (問いかけへの応答のみ)	無し	無し
社会貢献のなさ	元気になって仕事に行けるようになってほしい 人の世話ができる人になってほしい。体力があって真面目なので。何もできないでは申し訳ない	有り	有り	有り

表2-2 現在の親が困っている内容への対応とひきこもり者の状態

分類	語りの内容	家族との会話の有無	外出の有無	就労あるいは就労への意思の有無
経済的支援の模索	(息子の) 障害年金を積み立てようかと考えている	有り	有り	有り
家族との会話をもつことの模索	どうしたら家族の中でしゃべれるか。それからやっついていかないと。親子の間、きょうだいの間でしゃべれるようにならないか	有り (問いかけへの応答のみ)	無し	無し
かかわるきっかけを模索	父親が後1年で定年で、それからゆっくり関われば…。きっかけが…	有り (問いかけへの応答のみ)	無し	無し
待つ	焦っても仕方がない	有り	有り	有り

* () は補注

つものはお金なので』、【子どもの健康への不安】『体重を減らしてほしい。タバコをやめてほしい』、【家族との会話のなさ】『どうしたら家族の中でしゃべれるか。それからやっついていかないと。親子の間、きょうだいの間でしゃべれるようにならないか』についての語りがあった(表2-1)。また、【社会貢献のなさ】では『元気になって仕事に行けるようになってほしい』『人の世話ができる人になってほしい。体力があって真面目なので。何もできないでは申し訳ない』があがった。ひきこもり者の状態からみると、【家族との会話のなさ】では、ひきこもり者は家族との会話は問いかけへの応答のみ、外出、就労あるいは就労への意思はみられず、その他の語りでは家族との会話、外出、就労あるいは就労への意思があった。

親のこれら困っている内容への現在の対応として、【経済的支援の模索】では『(息子の) 障害年金を積み立てよ

うかと考えている』があがった(表2-2)。関わりの中では、【家族との会話をもつことの模索】では『どうしたら家族の中でしゃべれるか。それからやっついていかないと。親子の間、きょうだいの間でしゃべれるようにならないか』が、【かかわるきっかけを模索】では『父親が後1年で定年で、それからゆっくり関われば…。きっかけが…』が、【待つ】では『焦っても仕方がない』があがった。ひきこもり者の状態からみると、【家族との会話をもつことの模索】【かかわるきっかけを模索】では、ひきこもり者は家族との会話は問いかけへの応答のみ、外出、就労あるいは就労への意思はなく、その他の語りでは家族との会話、外出、就労あるいは就労への意思があった。

3) ひきこもりの子どもへの接し方で良かったと思う内容

【子どもが喜ぶことを考える】では『(自室の前に) 何かを置いておく喜んでくれるかなということしかなかつ

表3 ひきこもりの子どもへの接し方で良かったと思う内容

分類	話りの内容
子どもが喜ぶことを考える	(自室の前に)何かを置いておく喜んでくれるかなということしかなかった。母親として。初めは食べてくれなかったが、「これなら食べてくれるかな」という物を置いておくとは食べてくれる。(息子から)返品されることもあるが
子どもに電話をかける	気持ちは離れずに、親・子どもともに。子どもに毎日電話している

* ()は補注

表4 今後、親として取り組むと良いと思う内容とひきこもり者の状態

分類	話りの内容	家族との 会話の有無	外出の有無	就労あるい は就労への 意思の有無
自分が健康でいること	私が年を取ってきて、90、100(歳)まで生きて、子どもがひょっとして就職できれば	有り	有り	有り
礼節をしつけること	近所の噂にならずに(いるように)、(息子には近所の)誰かにあえば「頭を下げて」と言います	有り	有り	有り
休息と活動のメリハリをつけること	今は(自営業の仕事が)ない時期なので、半年くらいゆっくりして	有り	有り	有り
情報を集める	親が親の会に出て話をきいて	有り (問いかけへの 応答のみ)	無し	無し
子どもとコミュニケーションをとる	家庭の中で息子と話ができるようにしたい	有り (問いかけへの 応答のみ)	無し	無し
子どもに任せる	本人に任せる。サポートする人と見守って支えていきたい。心の支えになっていきたい	有り	有り	有り
考えられない	まだ(私が仕事をもっているので)、次の段階について考えられない	有り (問いかけへの 応答のみ)	無し	無し
	(今は)まだ私の年齢がそれほどでもない、自分がやれるという頭があって	有り (問いかけへの 応答のみ)	無し	無し

* ()は補注

た。母親として。初めは食べてくれなかったが、「これなら食べてくれるかな」という物を置いておくとは食べてくれる。(息子から)返品されることもあるが』という語りから、自室の前に食事を置くことを介したコミュニケーションを図りながら、栄養バランスに配慮したかわりがなされていた(表3)。また、【子どもに電話をかける】では『気持ちは離れずに、親・子どもともに。子どもに毎日電話している』といった語りもみられた。子どもとの日々のかかわりで大切にしたいことをもって関わっていた。

4) 今後、親として取り組むと良いと思う内容

自らできることとして、【自分が健康でいること】では『私が年を取ってきて、90、100(歳)まで生きて、子どもがひょっとして就職できれば』が、【情報を集める】では『親が親の会に出て話をきいて』があがった(表4)。そして、実際の子どものかかわりとして、【礼節をしつけること】では『近所の噂にならずに(いるように)、(息子には近所の)誰かにあえば「頭を下げて」と言います』が、【休息と活動のメリハリをつけること】では『今は(自営業の仕事が)ない時期なので、半年くらいゆっくりして』が、【子ども

とコミュニケーションをとる】では『家庭の中で息子と話ができるようにしたい』があがった。また、【子どもに任せる】(『本人に任せる。サポートする人と見守って支えていきたい。心の支えになっていきたい』)といった語りの一方で、【考えられない】(『まだ(私が仕事をもっている)ので、次の段階について考えられない』(今は)まだ私の年齢がそれほどでもない、自分がやれるという頭があつて』)という親もいた。ひきこもり者の状態からみると、【情報を集める】【子どもとコミュニケーションをとる】【考えられない】では、ひきこもり者は家族との会話は問いかけへの応答のみ、外出、就労あるいは就労への意思はみられず、その他の語りでは家族との会話、外出、就労あるいは就労への意思があった。

3. 社会参加に向けての内容と要望

1) 親が考える社会参加の内容

次に、親が考える社会参加の内容について表5-1に示した。ひきこもり者の社会参加については、【就労する】では『仕事に就くこと。職場でスポーツ、対話できて、長続きできれば』があがった。【仲間と良い体験をする】では『10

表 5-1 親が考える社会参加の内容

分類	語りの内容
就労する	仕事に就くこと。職場でスポーツ、対話できて、長続きできれば
仲間と良い体験をする	10月の(作業所の)お祭りで(息子が)なかなか帰って来なくて。みんなの中に入れることはいいこと
地域に存在する	普通みんながするような仕事をしての社会参加は無理なので、親と一緒に地域の人達の前に出られるようになるとか。本人が活動できるようなちょっとした畑仕事など(ができれば)、お金になるとかでなくて

* () は補注

表 5-2 社会参加のための要望

分類	語りの内容
就労支援	仕事場の確保と提供 サポートのある職場づくり
地域での認知	こういう子がいることを(地域が)知ってほしい。放置されないように。「知らないうちに亡くなっていたわ」でなく

* () は補注

表 6 ひきこもり者の社会参加への意思

分類	語りの内容
就労したい	「どこかに勤めたい。コロッケを作りたい」と言っている
人と関わりたい	息子は、(自分が入院したときの)お見舞いのお返しに近所の人に誕生日の花を贈ったり 不安になったら(相談機関に)1日に2回行って。息子は(相談機関の)先生を信頼していた

* () は補注

月の(作業所の)お祭りで(息子が)なかなか帰って来なくて。みんなの中に入れることはいいこと』、【地域に存在する】では『普通みんながするような仕事をしての社会参加は無理なので、親と一緒に地域の人達の前に出られるようになるとか。本人が活動できるようなちょっとした畑仕事など(ができれば)、お金になるとかでなくて』があがった。就労と、仲間の中に入ること、そして地域に存在し居場所があることを社会参加の内容として捉えていた。

2) 親の社会参加のための要望

社会参加への要望には、【就労支援】(『仕事場の確保と提供』『サポートのある職場づくり』)、【地域での認知】(『こういう子がいることを(地域が)知ってほしい。放置されないように。「知らないうちに亡くなっていたわ」でなく』)があがった(表5-2)。

3) ひきこもり者の社会参加への意思

ひきこもり者本人の社会参加への意思には、【就労したい】では『どこかに勤めたい。コロッケを作りたい』と言っている』、【人と関わりたい】では『息子は、(自分が入院したときの)お見舞いのお返しに近所の人に誕生日の花を贈ったり』『不安になったら(相談機関に)1日に2回行って。息子は(相談機関の)先生を信頼していた』があがった(表6)。

IV. 考察

1. ひきこもり者の現在

学卒後に1名を除く3名が何らかの職業に就き、なかには就労の意思があるにもかかわらず、仕事内容を理解することができず離職・転職を繰り返しているケースがあった。就職後にひきこもりとなるケースは、ある調査によれば就職後が33%を占めており(NPO法人なでしこの会, 2010)、学校と職業生活との接合の課題があるように思われる。ただしこの課題は、ひきこもり問題に限ってのものではなく、学卒後の離職者の多さという今日の日本社会全体の課題でもある(註4)。本研究のひきこもり者たちは、3名が就労への意思があり、現在作業所で就労している者や就労を目指して日常生活の自立訓練を受けている者がいる。彼らの幾人かは働くことを通しての社会参加を望んでおり、それへの支援が求められる。

ひきこもりのきっかけには、就職後の金銭問題、事故、進路選択といった誰もが大きなり小なり経験するであろうことがあがった。斎藤は、ひきこもりのきっかけに「成績の低下や受験・就労の失敗、友人の裏切りや失恋、いじめなど、一種の挫折体験がしばしば見られる」ことを指摘している(斎藤, 2002, p. 58)。これらのひきこもりのきっかけは誰もが少なからず経験するであろうことであるから、きっかけを取り除けばひきこもり問題は解決するとは考え

がちである。しかし、これまでの様々な困難や課題の積み重ねの中で突如目前の課題によってひきこもりへと至ったとみた場合、また、こうしたひきこもりのきっかけを乗り越えるためにはそれ相応のエネルギーと対処能力が必要であり、これらを持ち合わせていない場合に、どこにでもあり得るひきこもりのきっかけ、課題も、ひきこもり者本人にとっては非常に大きなハードルとして立ちはだかっている。

本研究のひきこもり者のひきこもり期間は14～29年に渡っている。あるひきこもり調査では、ひきこもり期間が10年以上が69%に及び、長期化する傾向がある(NPO法人なでしこの会, 2010)。また、本研究のひきこもり者のうち3名がひきこもり後に統合失調症の診断を受け、そのうち1名は現在精神科に通院している。学校段階で発達障害が疑われるケースも見受けられた。ひきこもり者は、ひきこもり後に精神疾患の診断を受けることが多く(石澤, 2015)、ひきこもり支援では、精神疾患への対応を踏まえて早期の精神疾患等の発見と治療が求められる。

現在の日常生活については、自室に閉じこもって外出しない者が1名いたが、ひきこもり者の起床時間・就寝時間、食事回数で大きな課題はみられなかった。家族との会話は、問いかけへの応答のみの者が1名いたが、4名全員があり、自宅では、テレビ、DVD視聴、インターネット、家事手伝いなどをしながら過ごし、落ち着いたルーティン化された生活を過ごしていると考えられる。先述のひきこもり調査では、自宅で、主にテレビをみたり(51%)、インターネットをしたり(15%)、家事手伝いをしており(12%)(NPO法人なでしこの会, 2010)、本研究のひきこもり者も同様の傾向にあった。

2. 親の対応と困難

ひきこもり当初の親の対応では、【接触を回避する】【怒る】【どうして良いかわからない】【子どもを信じるしかない】があがった。親たちは、ひきこもり状態への対応について【どうして良いかわからない】ために【接触を回避する】、ひきこもり状態を理解できないから【怒る】、具体的な対応が見つからないから【子どもを信じるしかない】という、ひきこもりへの理解と対応に苦慮し、暗中模索の中で目前の子どもに対峙している様相がうかがえた。親にとっては、【どうして良いかわからない】からこそ、今ここでかろうじて可能な対処療法的なかわりを至急の策と

して講じていると考えられる。親たちは、理解できない子どものひきこもり状態に言わばなすべがない状況下で、【接触を回避する】【怒る】という真逆な対応や、【子どもを信じるしかない】という祈りにも似た心情をもって子どもとかかわっていることが浮き彫りになった。ここに、親にとって、ひきこもり状態にある子どもをどう理解すべきか、また講じるべき対応がない、わからないという、ひきこもりの子どもへの受容的な関わりに係る親役割(川北, 2010)、すなわち子どもへのケア役割を果たせないことに係る困難が見て取れる。

現在の親が困っている内容では、子どもの現在の状態が、家族とのコミュニケーションと外出が可能で、就労しているあるいは就労の意思がある者と、家族とのコミュニケーションが希薄であり、外出せず、就労していないあるいは就労への意思がない者で顕著な相違がみられた。例えば、親の【死後の金銭的な不安】や【子どもの健康への不安】は、子どもに就労の意思がある状態での将来に向けての心配や不安であり、【社会貢献のなさ】も子どもが現在就労を目指して日常生活の自立訓練を受けている状況にあつての望みであると考えられる。こうした中で、先の外出せず、家族とのコミュニケーションが希薄なケースでは、現在の親の困っている内容に、【家族との会話のなさ】があがった。現在の親が困っている内容への対応において、本ケースは【家族との会話をもつことの模索】【かかわるきっかけを模索】している状況にあり、ひきこもり当初の親のなすべがない状況が継続しており、子どもをどう理解すべきか、また講じるべき対応がない、わからないという、子どもへのケア役割を果たせないことに係る困難が継続していることがうかがえた。一方で、現在の親の困っている内容への対応で【経済的支援の模索】【待つ】といった対応は、子どもがひきこもり状態から一歩前に歩み出したからこそその将来を見据えた、ゆとりのある対応であると考えられる。現在の親が困っている内容への対応であがった親の【死後の金銭的な不安】【経済的支援の模索】は、子どもを経済的に自立させること、それは就労することにつながる課題を提起し、ひきこもりの子どもの巣立ちを支える親役割(川北, 2010)、すなわち社会的に自立させるという親の社会化エージェントの役割を果たせないことに係る困難として存在していた。

そして、これらのひきこもり状態により異なる現在の親

が困っている内容とそれへの対応に関連して、さらに今後、親として取り組むと良いと思う内容の語りでは、如実に親の置かれた状態を知ることができる。【自分が健康でいること】【休息と活動のめりはりをつけること】という将来を見据えた対応、臨機応変な対応は、子どもがひきこもり状態から何らかの歩みを始め、社会へと目が向き始めているからここのような対応がとられていると考えられ、なかには【子どもに任せる】というひきこもりからの立ち上がりの兆しがあるからこそのゆとりのある対応がなされていた。しかしその一方で、外出せず、家族とのコミュニケーションが希薄なケースでは【情報を集める】(『親が親の会に出て話をきいて』)、【子どもとコミュニケーションをとる】(『家庭の中で息子と話ができるようにしたい』)、【考えられない】(『まだ(私が仕事をもっているので)、次の段階について考えられない』)という対応に苦慮している様子、どう対応すべきかに思い悩む様子があった。そして同時に、自室に閉じこもっている状況で対応に苦慮しつつも、家族が日常生活を送る上でそう影響はないために、次への新たな対応は考えずに今はこのままの状態を維持しようとする姿がうかがい知れるようにも思われる。

以上のように、ひきこもり当初の親の対応は、ひきこもりをどう理解し対応して良いのかに苦慮し、なすすべがない状況下でかろうじて可能な対応を講じており、子どもへのケア役割を果たせないことに係る困難がうかがえた。しかし、その後の現在の困っている内容とそれへの対応では、ひきこもり状態に即した相違が明らかになった。子どもがひきこもり状態から前に歩み始めたケースでは、親として子どもを経済的に自立させるという社会化エージェントの役割を果たせないことに係る困難があり、自室に閉じこもりひきこもり状態に変化がないケースでは、ひきこもり当初の親の対応にみられた子どもをどう理解すべきか、また講じるべき対応がない、わからないという子どもへのケア役割を果たせないことに係る困難が継続していた。親にとってのひきこもりに係る困難は、当初はどう子どもを理解し、対応するかに苦慮するといったケア役割を果たせないことによる困難として、そしてそれが克服された際には、次に経済的に自立させるという社会化エージェントの役割を果たせないことによる困難としてあると言えよう。

親がひきこもりの子どもへの接し方で良かったと思う内容には、【子どもが喜ぶことを考える】【子どもに電話をか

ける】という日常生活上の何気ないことを大切にしかかわりがなされていた。自室前に食事を置くことを通して、食事を介してのコミュニケーションを図りながら、子どもの食事の嗜好を知り、栄養バランスに考慮した食事となるよう気遣っていた。自室に閉じこもり、家庭の中でさえ減多に会うことがない子どもに対し自室前に食事を置くことは、食事を介した交流を図る唯一の保護者のかかわりである。また、子どもに毎日電話をかけることも、親にとっては親子の絆を確認する行為である。これらのかかわりは、些細なことではあるが、親子の絆を構築する試金石となっていると考えられる。ひきこもり支援のモデルで示されるように、支援は家族や近隣の人たちとの身近なつながりから、さらにより広い社会関係を築くという段階を経る(竹中, 2010, p. 48)とすれば、この親子のかかわり合いは、やがてこれを基点に発展し、親とは異なる人たちとの関係をとりもつ糸口ともなる可能性をわずかながらも秘めていると考える。

今後、親として取り組むと良いと思うこととしてあがった、【自分が健康でいること】(『私が年を取ってきて、90、100(歳)まで生きて、子どもがひょっとして就職できれば』)は、親の死後の生活を心配し不安視する思いからのものであり、ひきこもり支援が各家庭に任せられている現状(川北, 2004)を知らしめている。さらに、【考えられない】(『今は)まだ私の年齢がそれほどでもないので、自分がやれるという頭があって』)では、ひきこもり者への支援が行き届かない分、家族、とりわけ親がいかにかわるかが問われる事態となっていることが想像される。子どもに関わる問題は、家族に一任すべき問題とする現代社会の特徴が反映されている。

3. 社会参加に向けての親の思い・願い

親が考える社会参加の内容には、【就労する】【仲間と良い体験をする】、社会参加のための要望には【就労支援】があがった。ここであがった就労すること、対人関係の獲得は、ひきこもり問題の中で大きな課題であり、これらがゴールになっていると言っても過言ではない(石川, 2007)。ただし、これらに加えて【地域に存在する】【地域での認知】という地域で何らかの役割を見出し、地域の人々に子どもの存在を知ってほしいという願いも語られた。ここでの地域の人々とは、日常生活上において対面的な関わりがある人々を指すと考えられ、今後親として取

り組むと良いと思う内容であがった【礼節をしつけること】の『近所の噂にならずに(いるように)、(息子には近所の)誰かに会えば「頭を下げて」と言います』にもみられるように、この対面的な関わりがある近隣コミュニティから受け入れられることが重要なことであると言えよう。社会参加と言えば就労することと捉える傾向にあるが、社会参加には身近な近隣コミュニティとの対面的な関わりも同時に課題となる。竹中は、支援においてひきこもり者の暮らしの世界の大切さに言及している。ここでの暮らしの世界は、家庭内から始まり、日常生活上で関わる人々、作業所やハローワークなどの機関が含まれ(竹中, 2010, p.47-49)、対面的な関わりがある近隣コミュニティのみを想定せず、より広い社会関係、社会空間から成り立っている。一方で、本研究で親が願う対面的な関わりのある近隣コミュニティからの認知、受け入れは、竹中の暮らしの世界の中でも日常生活上で関わる人々との関わり、すなわち日常生活レベルを基点とした関わりの大切さを示唆していると考えられ、これはX町のように近隣コミュニティとの対面的関係が存在する地域の特性であるとも考えられる。【地域に存在する】【地域での認知】は、先の見通しが立たず、就労への期待をもつことができないひきこもり状態にある子どもへの親の何よりの願いであろう。そして、これら親の思い・願いとともに、ひきこもり者本人の社会参加への意思では、【就労したい】【人と関わりたい】があがった。

このように親やひきこもり者本人の社会参加への思いや願い、それはひきこもり者の社会参加、自立をどのように捉えるかに通底し、検討しなければならない大きな課題である。石川は、ひきこもり者への聞き取り調査を通して、ひきこもりからの回復を、「当事者一人ひとりが自分の生を肯定し、納得すること」(石川, 2007, p.238)であると述べている。社会参加すること—就労や経済的自立、対人関係の獲得を含めての社会関係があること、それは本研究の親が願うところに重なる。しかし、そのためには、社会参加の前段階で石川の言うひきこもり者本人が自らの生を肯定し引き受ける覚悟と決断ができるか、そのことがひきこもり者一人ひとりが歩み出すために必要であり、支援において問われる点であると思われる。

ひきこもり支援は、子どもに関わる問題を家族に一任し、家族任せにするのではなく、身近な近隣コミュニティとひきこもり者・親との関係をつなぐひきこもり支援、そして

親を含めた周囲のひきこもりの理解と対応の啓発が求められる。加えて、ひきこもり者の経済的自立と対人関係の獲得の課題の克服には、これらの機会と場の創出が必要であり、地域社会の関係機関の連携と協働による体制整備が求められる。

なお、本研究は調査対象者数が少なく、X町におけるひきこもり状態にある子どもの親の困難を明らかにしている点で、本研究での知見からひきこもり状態にある子どもの親の困難の全てを言うことは不可能であるが、親の困難の様相の一部分としての妥当性を持つと考えている。

V. まとめ

本研究では、ひきこもりの子どもをもつ親の困難を明らかにすることを目的に、父親1名、母親3名を対象に半構成的面接調査を実施した。

その結果、ひきこもり当初の親の対応は、ひきこもりをどう理解し対応して良いのかに苦慮し、なすすべがない状況下で、【接触を回避する】【子どもを怒る】【子どもを信じるしかない】など、かろうじて可能な対応を講じていた。しかし、その後の現在の困っている内容とそれへの対応では、ひきこもりの状態に即した相違が認められた。ひきこもり状態から一歩前に進み始めたケースでは、子どもを経済的に自立させるといふ親にとって社会化エージェントの役割に係る困難があり、自室に閉じこもりひきこもり状態に変化がないケースでは、ひきこもり当初の親の対応にみられた子どもをどう理解すべきか、また講じるべき対応がない、わからないというケア役割に係る困難が継続していた。親にとってのひきこもりの困難は、当初は子どもへの理解・対応がわからないというケア役割を果たせないことによる困難として、そしてそれが克服された際には、子どもを経済的に自立させるといふ社会化エージェントの役割を果たせないことによる困難としてあった。また、今後、親として対応すると良いと思うことでは、ひきこもり者への支援が行き届かない分、家族、とりわけ親がいかにかかわるかが問われる事態となっていることが想像された。親が考える社会参加の内容には【就労する】【仲間と良い体験をする】があがった。一方で、【地域に存在する】【地域での認知】といった対面的な関わりのある近隣コミュニティからの認知、受け入れをあげた親もいた。ひきこもり者の社会参加の意思には【就労したい】【人とかかわりたい】

があがった。

ひきこもり支援は、身近な近隣コミュニティとひきこもり者・親との関係をつなぐ支援、親を含めた周囲のひきこもりへの理解と対応の啓発、地域社会の関係機関が連携した体制整備が求められる。

註1) 竹中は、ひきこもり支援について、家族がひきこもり者を支援する段階から、支援者が家族を支援する段階、家族によるひきこもり者支援と支援者による家族を介したひきこもり者への間接的支援の段階、そして、支援者がひきこもり者を直接的に支援する段階、最後に家族・支援者を媒介に地域社会とつながる段階の5段階に言及している(竹中, 2010, p. 74)。

註2) こうしたひきこもり支援の課題については、内閣府 子ども若者・子育て施策総合推進室(2012)が実証的に分析している。

註3) 調査対象となったひきこもり者の親のうち、ひきこもり者1名については両親が調査に同席し、主に父親からの回答が中心であったため、調査対象者として母親は除き父親1名とした。

註4) 学校と職業生活との接合の課題は、例えば(宮本, 2004)などを参照されたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました父親、母親の皆様、関係者の皆様に御礼を申し上げます。

本研究は、研究協力関係者・機関との間に利益相反は存在しない。

文献

- 石川良子. (2007). ひきこもりのくゴール>—「就労」でもなく「対人関係」でもなく—. 青弓社.
- 石澤卓夫. (2015). 精神医学の立場から. 青木道忠, 関山美子, 高垣忠一郎ほか, ひきこもる人と歩む (pp. 176-197). 新日本出版社.
- 川北稔. (2004). 引きこもりの親の会の組織戦略—「親が変わる」という解決策の選択. 現代の社会病理, 19, 77-92.
- 川北稔. (2010). 曖昧な生きづらさと家族— ひきこもり問題を

通じた親役割の再構築. 家族研究年報, 35, 13-27.

宮本みち子. (2004). ポスト青年期と親子戦略—大人になる意味と形の変容—. 勁草書房.

内閣府 子ども若者・子育て施策総合推進室. (2012). 困難を有する子ども・若者の支援調査報告書. 内閣府.

齋藤万比古(研究代表者). (2007). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン(思春期のひきこもりをもたらず精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究)(p. 6). 厚生労働科学研究費補助金こころの科学研究事業.

齋藤環. (2002). 「ひきこもり」救出マニュアル. PHP 研究所.

竹中哲夫. (2010). ひきこもり支援論—一人とつながり、社会につなぐ道筋をつくる—. 明石書店.

特定非営利法人なでしこの会. (2010). 調査報告集—ひきこもりに悩む家族への聴き取り調査を通して見えてきた実態の深刻さと支援の必要性—. 独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業.

(受稿日 平成 29 年 8 月 28 日)

(採用日 平成 30 年 1 月 29 日)

Difficulties Faced by the *Hikikomori* Problem Narrated by the Parents

Kunie Matsumoto¹⁾, Kaori Hibi²⁾ and Emiko Taniguchi³⁾

1) Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) Nursing of Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

3) Department of Nursing, Faculty of Nursing, Gifu Shotoku Gakuen University

Abstract

The purpose of this study is to clarify the difficulties faced by the *Hikikomori* (those withdrawn from society) problem, as narrated by the parents.

Semi-structured interviews were conducted with four parents (one father and three mothers) who could reliably discuss the situation of the *Hikikomori* and who consented to participate in the study.

At the onset of their children's withdrawal, the parents took desperate measures such as "avoiding contact," "scolding the child," and "believing in my child." These measures were taken in a situation in which they did not understand the condition of *Hikikomori* and did not know how to adequately respond. However, over time, they currently respond to the situation by "exploring financial assistance," "waiting" in cases where in a person might seek to return to society after being withdrawn and by "exploring how to establish conversation with family members" and by "exploring opportunities to interact" in cases where in the withdrawn person has not shown a change and remains shut in his or her room. This illustrates differences in the difficulties experienced and responses depending on the condition of the *Hikikomori*. Furthermore, regarding responses parents would like to adopt in the future, it is imagined that because there is insufficient support for the *Hikikomori*, the family, specifically parents, are under pressure to figure out how to respond. Forms of participation in society suggested by the parents include "finding employment" and "sharing good experiences with others." On the other hand, other parents suggested "to be rooted in the community," "to be recognized in the community." These correspond to the recognition and acceptance from the neighborhood community with the face-to-face relationship. Regarding participation in society, the *Hikikomori* themselves wanted "to find employment" and "interact with others."

In cases where in a person might seek to return to society after being withdrawn, the difficulties faced by parents as socialization agents helping their children become economically independent and re-adapt to society are unclear. In cases where no improvement could be seen in one's social withdrawal, their parents noted that in earlier stages they had had difficulty finding how to understand their children's behaviors and how to deal with them, and finding any way out. This means that parents could not serve a function of providing care. Support for *Hikikomori* requires connecting the neighborhood community with *Hikikomori* and their parents as well as an improved understanding of the children's situation, how parents and others should respond to them, and implementation of a system that works in collaboration with relevant organizations in the community to help these children.

Key words: Hikikomori problem, parents with socially withdrawn children, difficulties faced by the Hikikomori problem

